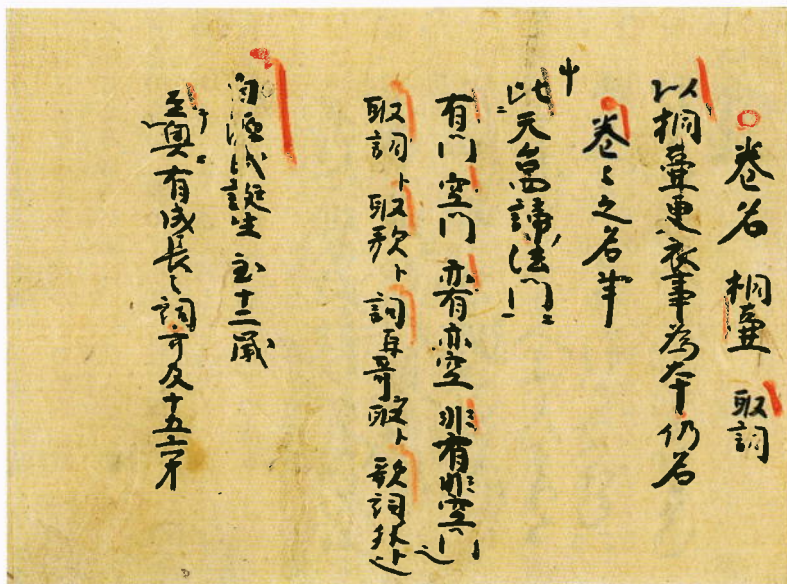
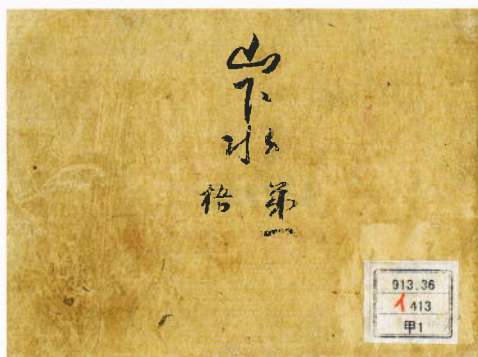


# やまとの名品 天理図書館



〈原寸〉

やま した みず  
山下 水

さん じょう にし さね き  
三条西実枝自筆

永禄13年(1570)~天正頃写

縦7.6(~10.6)cm 横10.4(~11.6)cm

室町時代末期に成立した、『源氏物語』の注釈書。書名の由来は、源氏物語の「源」に通ずるところの「山の下の水」「山陰を流れる水」の意である。

著者は三条西実枝（一五一一～一五七九）。中世源氏学の中心的存在であった三条西実隆を祖父とし、父は公条。三条西家の正統であるが、長く東国・駿河を流浪して、帰京したのは永祿十二年、五十九歳の年であった。その後の文学活動はめぐましく、翌年三月から宮中において源氏物語講釈を開始、同時に、三条西家の説を中心として源氏物語の諸注集成に取りかかった。本書『山下水』は、その実枝

自筆稿本二十六冊である。本書の手のひらに収まる大きさ、かさばらないごく薄様の料紙は、懷中に具合の良い、極めて小振りなものである。また本の綴じも、注釈項目の増加に応じて料紙の差し替えが容易な、特殊な仮綴じとなっている。こうした姿からは、源氏物語講義において、また手控えとして、常に携帯しつつ注の考察、増加を行っていた、著者実枝の日常が思われる。いったん成立した後も、本書には「箋日」として次々に増補が加えられている。

語諸注集成である『岷江入楚』(慶長三年(一五九八)成立)の基本的名な注釈書として使われ、その名が広く知られるようになった。『山下水』の伝本は、『岷江入楚』に使用のために写された中院家の写本しか知られていなかったが、近年、本書の出現によって、その自筆本の姿、内容が知られることとなった。制作途上の著者自筆稿本として、原装のままに伝存した貴重なものである。

(天理図書館 岡寫偉久子)

